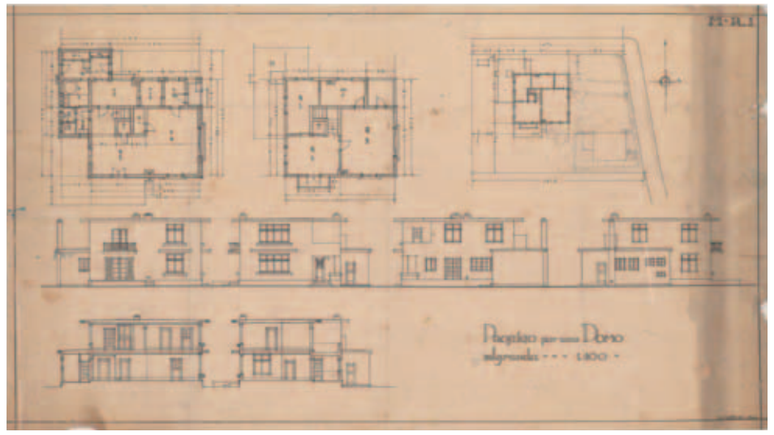
本野精吾の関係資料について



1. 本野邸設計図（1923年／AN.5342-05）

2. 丸テーブル
（1920年代／AN.5237）

3. 舞台衣裳デザイン
（ダンサニー「宿の一夜」／1923年
／AN.4888-30）

4. 舞台デザイン（ヘルマン・バング「兄弟」／1923年／AN.4888-28）

5. 出雲丸室内パース
（1939年頃か／AN.5342-07）

今回は、先ごろ美術工芸資料館で開催した展覧会、「建築家・本野精吾展―モダンデザインの先駆者―」（2010年1月18日～3月11日）において、はじめてその全体像を伝えることのできた本野精吾（1882～1944年）に関係する収蔵品について紹介したい。

この展覧会は、モダニズムの建築やデザインの黎明期に京都を拠点に活躍し、京都工芸繊維大学の前身校のひとつである京都高等工芸学校の教授を務めた本野精吾に焦点を当て、その活動の幅広さを紹介するとともに、彼の仕事を通して、広く日本のモダニズム建築やデザインについての新しい視点を提示しようとするものであった。

本野精吾は、本野盛亨の5男として、1882年に東京で生まれている。父・盛亨は、大蔵省に勤務した後に、読売新聞を創業した一人としても知られる。また、本野精吾の兄弟たちも、後に、外務大臣や読売新聞社長、京都帝国大学教授などを務めるなど、さまざまな分野で幅広く活躍した。そのような恵まれた家庭環境に育った本野精吾は、1906年、東京帝国大学建築学科を卒業後、三菱合資会社地所部（現在の三菱地所設計）に就職し、設計実務の仕事に携わっている。しかし、1908年、当時、京都高等工芸学校教授だった武田五一（1872～1938年）の強い招きによって、京都高等工芸学校の図案科教授に就任する。そして、1943年に退官するまでの35年間の長きにわたって、同校の図案科長を務めるなど、武田五一の後を引き継いで、現在の京都工芸繊維大学へと続く建築とデザインにまたがる造形教育の基礎を築いた。

彼が設計を手がけた代表的な建築としては、①「西陣織物会館」（現・京都市考古資料館、1914年）、②「本野精吾自邸」（1924年）、③「鶴巻鶴一（京都高等工芸学校校長）邸」（現・栗原邸、1929年）、④「京都高等工芸学校本館」（現・京都工芸繊維大学3号館、1930年）などがある。そして、いずれの建物も、国の登録文化財（④）や京都市の指定文化財（①）、近代建築の保存を提唱する国際的な学術組織であるDOCOMOMOの日本支部の選定建築物（②及び③）になるなど、近年、その文化財的な価値が認められている。

また、本野の活動は、建築だけにとどまらず、食器や工芸、グラフィック・デザイン、舞台デザイン、衣装デザイン、家具、インテリア、そして、船体デザインに至るまで、幅広い分野に及んだ。1927年には、当時、最大規模の建築運動団体であった、「日本インターナショナル建築会」の設立の中心となる。また、後に、『ニッポン』（1934年）などの著作を通して「桂離宮」に光を当てることになる著名なドイツ人建築家のブルーノ・タウト（1880～1938年）の1933年の来日を実現させている。さらに、その後も、広告についての研究団体「プレスアルト研究会」を設立して機関誌を編集するなど、本野は、建築やデザインの普及にも尽力した。

いずれの活動も、20世紀初頭に始まる近代建築運動である、モダニズムの理念や方法に基づくものである点では共通している。しかし、その一方で、日本や京都に特有のあり方を模索し、装飾的なものを拒むことなく柔軟に取り入れるなど、その手法は幅広く、従来のモダニズムの見方では捉えきれないものも多数見受けられる。そうした意味で、本野の活動は、広くモダニズムの見直しが進められつつある現代にあって、その新しい見方を提示してくれる貴重な存在にもなり始めているといえるだろう。

幸いなことに、今回の展覧会では、本野精吾のご遺族から、数年来にわたって、設計原図や紙焼写真だけでなく、家具や自筆の原稿類に至るまで、数多くの貴重な資料の寄贈を受けてきた。また、「旧・鶴巻鶴一邸」や「旧・大橋邸」の関係者や京都高等工芸学校の卒業生からも、資料の提供や寄贈などの協力を得てきた。こうした寄贈資料を含めて、展覧会開催の時点で、美術工芸資料館には、本野関連資料が、およそ840点収蔵されている。さらに、既存の収蔵資料の中には、本野が教育を行った当時の学生たちの卒業制作作品も多数含まれている。これらもまた、造形教育の歴史を知る上での貴重な資料である。そして、何よりも、2008年に国の登録文化財に指定された、現在の3号館、倉庫、門衛所という本野の手がけた複数の建築作品が、大学構内に現存することの意味は大きい。

おりしも、2009年は、京都工芸繊維大学が戦後の新制大学として創立されて60周年の節目の年にあたっている。このような中で、草創期の建築とデザインにまたがる造形教育を展開した中心人物でもあった本野精吾の活動を振り返ることは、大学の歴史的伝統やアイデンティティを再確認し、さらに、今後の造形教育のあり方を考える上でも、大きな手がかりを与えてくれるに違いない。そして、それは、京都だけにとどまらず、広く、日本や世界におけるモダニズムとは、どのような問題意識と方法を持っていたのかを再考する上でも、貴重な視点を与えてくれることだろう。

美術工芸資料館では、これまで、過去10年間にわたって、日本の近代建築を代表する建築家の一人である村野藤吾（1891～1984年）の仕事を紹介する「村野藤吾建築設計図展」を開催してきた。また、その他にも、モダニズム建築運動の最重要な建築家といわれるル・コルビュジエに学んだ吉阪隆正（1917～1980年）、その作品である「森の墓地」がユネスコの世界文化遺産にも登録された北欧スウェーデンのグンナール・アスプルンド（1885～1940年）といった建築家の展覧会や、古今東西の建築物を構造デザインの視点から紹介する「アーキニアリング・デザイン展」など、建築に関する巡回展も行ってきた。残念ながら、日本にはまとまった形での公的な建築博物館は存在しない。こうした中で、教育と研究の場である大学に設置された博物館として、建築に関する資料を収集し、展示活動を続けることは、広く建築文化を後世に伝えると共に、未来へとつながる建築教育の実践でもあるのだと思う。今後も、独自な視点から、建築資料の収集作業と展示活動を継続していきたいと考えている。

美術工芸資料館教授　松隈 洋